
エンド・オブ・ザ・ワールド スーパーロボットウォーズ

不良品

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンド・オブ・ザ・ワールド スーパーロボットウォーズ

【Nコード】

N68230

【作者名】

不良品

【あらすじ】

宇宙と、消えたはずの地球文明、異世界。三つの世界で繰り広げられる、大いなるスーパーロボットたちの演武。

プロローグ

地上は燃えていた。夜空の下、街は崩れ、人々は悲しみ嘆いていた。住みなれた故郷：生まれ育ち、当たり前のように過ごしてきた日常の象徴。それが消えていく。

人々の嘆き悲しむ声があふれる。それを見下す、怪物たち。巨大な機械の怪物の前に、人は無力だ。

一人の少年が居た。涙を流し、父母の居たであろう、家の残骸を背に。

皆死んだ。突然に現れた、怪物によって。

「なんでだよ……」

絶望。悲しみ。怒り。渦巻く感情を、しかし、少年は吐き出すことができない。怪物に、彼のような子供が、いや、そもそも大人でも歯向かうことはできない。

「うわああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

ただ、叫ぶことしかできない。そんな少年に迫る、怪物の足。大きな影が少年を覆う。

しぬんだ。少年は、そう思った。そして、せめて痛くなければいいな、と思った。目を閉じ、来るべき死に備える。

そんな、時だった。

「……ロケット・パァ ンチツ！！！」

そんな声が夜空を切り裂く。そして、鉄の拳が唸りくろがねを上げて怪物を殴り倒す。倒れた怪物に、鉄の巨人が現れて、殴りつける。そして、片方だけなかった腕に先ほどの腕が取り付く。悪魔のような、黒い鉄巨人。しかし、その巨人は人々と街を守るように仁王立ちする。

「やーーーーーい、デクノボー！俺とマジンガーがいる限り、好

き勝手させねえぞ！」

巨人（マジンガーZ）の頭部のコクピットに居る少年、兜甲児が言った。

「君だけではないだろう？」

続いて複数の機体が夜空から振ってくる。

マジンガーよりも大きい、深紅の巨体。ゲッターロボ。

マジンガーと同程度の白い戦士^{モビルスーツ}。ガンダム

マジンガーに似通った偉大な勇者、グレートマジンガー。

120メートル近い、日輪の巨人。ダイターン3。

「それより、さつさとこいつらをかたつけようか！」

ダイターン3に乗る青年、破嵐^{はいらん}万丈^{むさう}が言う。それに呼応してロボツトたちが動き出す。それに群がる、機械の化け物たち。

「マジンガー、ブレード！！」

グレートマジンガーの両腿より、ふた振りの剣が射出される。それを握り、グレートマジンガーが近くに居た怪物を切り裂く。緑の液体が飛び散る。緑の切りを抜けてゲッターロボが駆けた。両肩から斧が飛び出る。それを掴むと、一本を投げつけ、もう一本で敵を裂く。トマホークが弧を描いて敵を切り裂いて行く。そのゲッターに敵が群がる。ゲッターは敵に動きを封じられた。

「おい、竜馬！」

パイロットの一人、神隼人が焦らすように言った。

「ゲッターー！ー！ービ　　いいム！」

ゲッターの腹部からゲッター線があふれ出て、光線が放たれる。

前面の敵を消滅させる。ゲッターを捕らえていた敵達が怯んだ隙に、ガンダム、マジンガーZがそれらの敵を倒す。

「オープン、ゲット！」

ゲッターが三つの戦闘機に分離し、瞬く間に再合体する。細身のゲッターロボへと変容する。そして、腕の巨大なドリルを、音速を超えた速さで敵に突き付け、破壊していく。

「これで、終わりかな？」

最後の一機をダイターのハンマーが粉碎する。五体のロボットのみがそこに立っていた。

「フハハハハハハハハハハ！！見事だな、スーパーロボット軍団よ！！」

響き渡る邪悪な声。

「こ、この声は……ドクター・ヘル！」

甲児が叫ぶ。空中に、巨大な要塞が浮かんでいた。

「先ほどはあんなもの、なかったはずだが……」

ガンダムのコクピットで、アムロ・レイは呟いた。

「何であるかと……倒すのみ！」

剣鉄也が言う。空には雲が集まり、雷の音が鳴り響く。グレートマジンガーが空に腕を上げ、その人差し指を立てる。雷が、グレートに集まっていく。

「サンダー……ブレイ……ブレイ……ク……！！」

極限まで集められた、一撃が要塞に向かう。しかし、それははじき返される。

「な、何！？」

「フハハハハハハハ！貴様の攻撃など、もはや脅威ではない！剣鉄也！スーパーロボット軍団よ！」

けたたましい笑い声が漆黒の空に木霊する。

「この要塞ザッスーラの前に、貴様らは無力よおお……」

「それはどうかな？」

ダイター3の中で、万丈が不敵にほほ笑んだ。そして、手をかざし、頭部の日輪に光が集まる。

「日輪の力を借りて、今、必殺の……」

飛び上がり、ザッスーラに目掛け、それを放つ。

「サン、アタック！！」

それはザッスーラの装甲に大きな風穴を開ける。

「むうう！？さ、さすがにこれでは……！！」

ヘルが呻く。わなわなと拳を振るわせる。

「ええー！　い、こくなつたら・・・」

「させるかよ！」

マジンガ　とグレートが風穴に向かって、拳を向ける。

「ロケツトパー！　パー！　パー！　パー！　パー！　パー！」

「ドリルプレッシャー、パンチ！！！」

唸りを上げて拳が要塞を叩きつける。追い打ちをかけるように、ガンダムの正確な射撃と、ゲッターロボのトマホークが来る。

「ぬううおおおお、おのれええええええええええ！！！」

ヘルの憎しみの声と共に、ザツスーラは大爆発した。

西暦20XX年。人類は地上から宇宙への移民を開始した。それは大いなる挑戦であった。宇宙へと巣立った人類であったが、それと同時に、幾つかの問題が出現した。

第一に、地球の恐竜帝国。ドクターヘルが発見した機械獣軍団を配下にし、太古より潜伏してきた地下世界より再来したのである。

第二に、宇宙のジオン公国。かねてより、連邦政府に反感を持っていた、宇宙コロニー国家、サイド3が突如、独立を宣言したのであった。

この事態に対し、連邦政府はなす術を持たなかった。しかし、ジオン公国との戦いの中、一人の少年アムロ・レイを始め、テンカワ・アキト、ケーン・ワカバといった少年兵が新兵器を偶然に手にし、戦いを導いて行った。結果、ジオンは崩壊し、ジオンのもとで手を組んでいた木星勢力とギガノスは連邦政府との和平を結んだ。

一方の地上でも、来るべき戦いに備え作られていたスーパーロボットの活躍により、侵略者は倒された。マジンガーZやゲッターロボ、ダイターン3といったロボットがデビューしたのである。

連邦政府内の改革派、ミスマル提督、ブレックス准将、若き名艦長ブライト・ノアらに加え、スーパーロボットを所有する研究所が結末に、一つの部隊を結成した。

第十三独立部隊ロンドベル。最新鋭艦アーガマ、ナデシコ、マクロスなどを所有し、有事の際には独自に行動できるなど、多くの面で優遇されているように見える。しかしながら、軍部での立場は低く、現在はジオンや恐竜帝国残党の被害も少なく、その存在意義を疑問視する声も少なくはない。

「だいたいさ、俺らじゃなくても、連邦軍はいっぱいいるのにさ、連日俺らだけが戦うって気に居らねえよな」

別地区での任務を終えた少年、ケーンが呟く。いくら軍隊に居ようと、もともと彼らは一般市民でしかないのだ。それが戦争が終わっても、こうして軍にいる。不満が無い訳が無いのだ。

「それよか、今度木星の方に使節が行くらしいぜ。いよいよ、国交樹立かな？」

甲児がいうが、隼人は首を振る。

「奴さんがた、バーム星人つてのと戦ってるらしくてな、今回の使節も、その戦いの支援を取り付けるための口実でしかないらしいぞ」

「ひえー、今度は木星に俺ら行くのかよ！」

嘆く一同。そんな中、施設内で警報が鳴る。

「何だ!？」

「大変だぞ、日本の首都、東京に多数の正体不明機が出現した!!」
誰かがそう言った。皆が弾けたように、己の愛機のもとへと向かった。

そして、その日、地球から人類は姿を消した。

「一体どうなっているのか!？」

ロンドベル指令ブライトは月の都市、グラナダのロンドベル本部に居た。突如として地球空の通信が途絶え、回復したかと思うと、

地上に人はいなかった。荒野が広がっていた。

「くそ、ロンドベルのメンバーで現在、ここに居るのは？」

傍らに居た副官に聞く。

「テンカワ・アキト、破嵐万丈、アムロ・レイ少尉、一条輝少尉のみです。ドラグナー隊、マジンガ・ゲッター両チームは地球に居たのですが、連絡はとれません」

「ええい、どうなっているのだ?!」

モニター画面には、荒廃した台地と、東京にある、大きなドームのみが映っていた。その巨大なドームは、まるで木星であった。

「一体、何が……」

ブライトの呟きが虚しく響いた。

「はああああ……」

舞浜市。近未来、をモチーフにデザインされた町で少年、ソゴル・キョウは欠伸をしていた。

「今日も、平和だなア……」

空は青々と広がっていた。太陽が、眩しかった。また、平穏な日々が続くのだと、誰もが信じていた……。

参戦原作

参戦原作名（予定）順不同

今後、他にも増えていく予定。

機動戦士ガンダム

機動戦士Zガンダム

機動戦士ガンダムZZ

マジンガーZ

グレートマジンガー

グレンダイザー

ゲッターロボ

ゲッターロボG

真ゲッターロボ（漫画版）

無敵超人ザンボット3

無敵鋼人ダイターン3

超時空要塞マクロス

闘将ダイモス

ゼーガペイン

機動戦艦ナデシコ

機動戦艦ナデシコ 劇場版

聖戦士ダンバイン

冥王計画ゼオライマー

マシンロボ クロノスの大逆襲

機甲戦記ドラグナー

重戦記エルガイム

晝く影

あの出来事から三年の月日がたった。月の都市グラナダのロンドベル本部においてブライト・ノアは疲れきった顔をしていた。地球の連邦本部の消失。それは連邦の中樞が消えた、ということだ。和平を考えていたギガノスは戦いを挑んできた。また、バームとの戦争中の木連もまた、地球圏に対し、怪しい動きを見せていた。

三年前、地球の仲間を失っただけでなく、その後の混乱で、ミスマル・ユリカ、テンカワ・アキトの行方も知れず。火星の異変を聞きつけた破嵐万丈も居なくなって久しい。

「ブライト艦長、ギガノス軍です！」
「ん・・・」

ブライトが手で合図する。それはこの三年間毎日のように出される合図である。すなわち「出撃」だ。

本部内のハッチから続々とバルキリーやGM改^{ジム}などの機体が出撃する中、エースパイロットたちが期待に乗り込む。

「アムロ・レイ大尉、ガンダム出るぞ！」
度重なるダメージを受け、ボロボロのガンダムであったが、未だ現役である。その隣から出撃する、一条輝中尉のバルキリー。二機が宇宙へと飛び立っていく。

戦いは早くも激戦となっていた。ギガノスのメタルアーマーの数の方が勝っていた。戦況はロンドベルが劣性であった。

「そこっ！」
アムロの射撃が敵を打つ。一条機から放たれた無数のミサイルが敵増援部隊に向かって行き、大きな光へと変えた。

「アムロ・レイ！」
激戦の中、ノイズに交じって声が聞こえた。と、同時に、ガンダムに迫る、紫のメタルアーマーが一機。ギガノスのエース「蒼き鷹」の駆るファルゲンである。背部よりマルチディスプレイチャーを打

ち出し、その間に一気にガンダムとの距離を詰める。

「マイヨ・プラート!!!」

アムロは忌々しげに敵の名を叫ぶ。レーザーソードを翳すファルゲンに対し、ビームサーベルで受け流し、後ろに下がる。そこへ一条機の戦闘機が変形し、人型になりその手に持った銃を放つ。後退するファルゲン。アムロの放つビームがファルゲンをかすめた。

「流石だな、ロンドベルの白い悪魔……だが!」

直後、月の都市グラナダが爆発を起こす。

「なに!?!」

「侵入を許したのか!」

慌てるロンドベル。対して強気のギガノス軍。

「我がギガノスの大義の名のもとに……散るがいい!」

ファルゲンがレーザーソードをガンダムに振り下ろす。反応が間に合わずに、ガンダムの腕が落ちる。

「くそ、間に合わない!」

一条機が飛び込み、アムロを庇おうとするがギガノスのメタルアーマーがそれを阻む。

「アムロ大尉!」

一条輝が叫ぶ。しかし、もはや味方は総崩れであり、助けなど、来ない。彼らは負けてしまった。そしておそらくこの宇宙で、消えるだろう。ガンダムのコクピット目掛けてファルゲンの刃が。

振り下ろされはしなかった。ガンダムと、ファルゲンの間に、人型のシルエットが居た。人間大の、プロテクトアーマーを装着した、男がいた。

「悪の暴力に屈せず、恐怖と戦う正義の気力、人それを『勇氣』という……」

男が静かに、しかしはつきりと言う。戦場は静寂に包まれる。それを破るように、マイヨは言った。

「……!?!何者だ!?!」

男は力強く敵を見据えて言った。

「貴様らに名乗る名はない!!」

トウ!と飛び上がると男が光に包まれる。次の瞬間、蒼いロボットが一体、ギガノスの中に奔った。

「天空よりの使者、ケンリユウ見参!」

メタルアーマーたちが次々の爆発する。

「なに!・・・クツ、目的は果たした。今回は、撤退する」

ファルゲンが踵を返す。生き残ったメタルアーマーもそれに続く。

「・・・助かったな・・・」

アムロが呟く。先ほどの人物は、既にこの宙域にはいなかった。

「何者なんだ・・・?」

いや、それよりも、とアムロはグラナダを見た。

「・・・っち」

ロンドベル本部は無事であったが、軍の基地が破壊されていた。

地球連邦軍所属のキリコ・キュービィは不思議なものを見た。秘密作戦と言われた任務で襲ったその場所は味方の基地であったからだ。グラナダの軍事基地。混乱する中、キリコはあるものを見つけた。

コールドスリープ用のカプセルらしきもの。そこに眠る裸の女性。近寄るとそれは目を見開き、こちらを凝視した。

「・・・!?!」

しばらく、目が重なり合う。しかし、耐えきれず、キリコは目をそらし、カプセルの外壁を閉じることでその視線から逃れた。そんなキリコとカプセルを発見する、謎の一群。

「それが、素体か・・・」

義眼の男、北辰が呟いた。赤い、人型に乗った男はカプセルを握ると、キリコを見た。

「中身を見たのか?いや、関係はないな・・・やれ」

「はん、生身の人間殺す趣味はないんだがね」

傍らに居たモバイルスーツに乗った男、ヤザン・ゲイブルが言った。モバイルスーツの持つライフルが施設を攻撃する。その爆風でキリコは吹き飛ばされる。

「ぐあ……」

宇宙に放り出されたキリコ。あれでは助かるまい、とヤザンは思う。北辰とヤザンは目的の達成を、蒼い鷹に伝えようと、撤退を開始した。

月のグラナダ。その裏側に、ギガノス帝国はあった。その指導者、ギルトール元帥のもとに数名の者が居た。

「閣下、無事に任務を果たして参りました」

プラート大尉が言う。横にはヤザンや、「ソロモンの悪夢」と呼ばれたアナベル・ガトーらが控えていた。

「ふむ、ご苦労であったプラート大尉」

そう言つて横の北辰を見る。

「これで、木星は満足してくれたかね？」

「はい、閣下……」

ニヤリと、北辰が笑った。

「木連はギガノスに協力させていただきます……」

対立するはずの木星とギガノス。木星はバームとの戦争で連邦に割ける戦力は少ない。故に、ギガノスと手を組むしかない。ギガノスもまた、似たようなもの。先の任務で手に入れたものを使い、木連で兵士を作る。それをギガノスにも分け与える。それが、秘かに両勢力で交わされた密約であった。

ギルトール元帥の部屋を去り、北辰は木連への帰路に着く。

「……どうやら、ネズミが一匹いるようだな……」

木連の研究施設が襲われている。そんな報を聞いた北辰はそう呟く。思い浮かぶのは一人の叛逆者の姿。

「……哀れだな、テンカワ・アキト……」

不気味な嘲笑を浮かべた北辰はつかつかと廊下を歩いて行った。

宇宙空間に浮かぶ、一つの影。ギガノスを前にそれは佇んでいた。黒い鎧に包まれた、ソレは静かに前を向いていた。

北辰。それが彼の狙いである。最愛の人を奪い、そして……。そんなソレの前に、巨大なナニカが現れる。

「虫けらめ……」

それは、冥王と呼ばれるもの。かつて、八卦集と言われた強力なロボット軍団と、ハウドラゴンの異名を持つ鉄鋼龍と呼ばれた組織を壊滅させた、恐るべきマシン。それが浮かんでいた。

「……ゼオライマーの完成までは、ギガノスには滅んでもらう訳にはいかんからな……」

男、木原マサキがそう言うと、冥王はその拳を、眼前のソレに振り下ろす。しかし、それは素早くそれを避けると、両腕のハンドカノン撃つ。

「ムダムダムダムダァー!!」

嗤うマサキ。黒いそれを殴りつける。

「ッ!!」

流石に勝ち目は無い。そう思ったのかそれは踵を返して逃げる。

「逃がすものか……」

それに向けてエネルギー波を撃つゼオライマー。その瞬間、それは消えた。

「……っ!? ボソンジャンプか……!」

驚愕するマサキ。しかし、それはすぐに去った。

「ハエめ……まあいい、早く最終段階に進まねばな……」

この世を冥府にし、マサキが冥王となるために。

動き出す歯車

「ブライト！」

アムロがロンドベルの医療施設へと入る。ブライトはベッドで眠っていた。

「様子は？」

脇に控えた士官に訊ねた。

「命に別状はありませんが……」

「指令がこれではな……」

ミスマル艦長は今、いない。ロンドベルの臨時指令は早瀬未紗中佐しかいないであろう。人材不足は否めない。

「グラナダの被害は？」

「施設のみです。しかし……」

「なんだ？」

「実は、月の人類革新研究所から何かが盗み出され、試作されていたガンダムが盗まれた、と……」

「俺は聞いていないぞ」

「ブライト指令も知らされていないと言っていました……」

「くそ、これだから連邦は……」

連邦の体制は変わらない。故に、ジオンやギガノスの台頭を許したのだ。

「あと、大尉に、とアナハイムからガンダムが届いています。盗まれた機体と共に開発されていたものだそうです。あと、人員の補充がやっと許されたようです」

「ん」

ガンダムが先ほどの戦闘で中破している状況ではそれはありがたいことだ。

ガンダム試作1号機、4号機。コウ・ウラキ少尉。これが今回の補充であった。

「ウラキ少尉です」

「アムロ・レイだ。よろしく頼む」

「はっ」

いかにも新人だが、補充された殻には実力はあるのだろう。アムロは自分の乗るガンダム試作4号機を見上げた。

(・・・あれができるまでは・・・な・・・)

着々と続けられている、アムロの設計したガンダムの建設。それはまだまだかかる。理論上、ニュータイプの反応速度に対応させた機体。アムロの限界を生かせる機体はまだ、ない。焦りだけが広がっていく。

キリコ・キュービイが目を覚ますと、そこは軍の施設であろう。軍人が何人かいた。彼らは尋問を開始した。

素体はどこへやった。貴様らの指導者は。目的はなんだ。

しかし、キリコは知らない、としか言えなかった。自分はただ、任務だと言われた、と。

「どう思います、大尉？」

「恐らく、彼は知らないだろうな……。軍に内通者が居る」
アムロが顔をしかめて言う。

「・・・取り敢えず、彼はロンドベルで監視する」
「は」

キリコ・キュービイ。寡黙な青年だが、何かを感じる。そう、何か特別なものを。

一方、解放されたキリコは自分の愛機、スコープドッグで訓練の真っ最中であった。全長4メートルほどの量産機アーマードトルーパー。生産性を重視し、戦場では使い捨てにされることも多い。ロンドベルにおいては小柄な兵器だが、ナデシコのエステバリスなど、小型の機体との連携も元々あったので、ATも普通に部隊に組み込

まれているのだ。

相手となつてゐるのはウラキのガンダム試作1号機だ。体格差ゆえにATではダメージは届かない。かと言ってガンダムではATを狙うには小さすぎる。

アムロは今まで、兵器の統一を主張してきたが、今の戦場を見るとそれは限りなく不可能だ。ATにモビルスーツ、バルキリー、ドラグーン、エステバリス。種類だけで5つもあり、その中にはさらに何種類にも分化していく。かつて、グレートマジンガーが居た頃には、量産も考えられていたというから、嗤うしかない。

「それよりも・・・」

ギガノス軍が盗んだもの。それが何なのかは知らされていない。何がどうなつてゐるのか、アムロにはわからない。

「厄介だな・・・」

ソロモン。それはかつてのジオンの宇宙要塞であつた場所。現在は連邦艦隊の基地となつてゐる。

その上空遙かに奪われたガンダム試作2号機がいた。おぞましい顔のガンダムはバズーカを構えていた。だが、ただのバズーカではない。現在、使用の禁止されている核。それがバズーカの中身である。

「フッフ・・・気づくまい、連邦のウジ虫ども・・・」

コクピットでアナベル・ガト は笑つた。

「・・・む!？」

そんなガンダムの前に一つの影が躍り出る。

「やれやれ、久々戻ってきたら、なんか凄いことになりそうになつてゐるよ・・・」

「この機体、ダイターン3!!」

「人間同士争つてる場合じゃないでしょうに!」

迫る巨人。だが、下がる訳にはいかない。

「再びジオンの理想を掲げるために・・・ソロモンよ、私は帰つ

てきた……!!」

核は発射された。そして、光だけが広がって行った。

同時刻。ゼダンの門。旧名ア・バオア・クー。連邦とジオンの最終決戦地。ここでクーデターが起きた。首謀者はジャミトフ・ハイマン。

「我々ティターンズは連邦に宣戦を布告する！」

ソロモン艦隊の消滅。連邦の一部隊ティターンズの謀反。仕組んだように事態は起こって行った。

「ふふふ、破嵐万丈……異星人との争いを前に、我々はまず、一つの巨大な国を作る必要がある。それは連邦ではなく、ジオンでなければならぬのだ……」

ダメージを追ったダイターンの前でガンダムは嗤った。

「ザビ家は滅びた……」

「ミネバさまがおられる。ギガノスも、木連も、再びジオン公国と合体することとなる。ジオンの復活だ！」

「再び、戦火を広げようというのか!？」

「必要ならば、な!だが、人類の進化のためには必要なことだ!」

「自分勝手なエゴだね、それは……」

ダイターンは変形すると、ソロモンを離れる。ガンダムに追う力は、残ってはいないだろう。

「また会おう、アナベル・ガトー!」

ロンドベルに知らせねばならない。迫りくる第三の脅威について……宇宙大同盟……!」

ボアザン、ベガ、キャンベル、ガイゾック……。存在の身が確認されていただけの異星人が地球圏に攻めてくることを。

どこかの世界でそれは事態を見ていた。

「これも予定どおり、ですか……?偉大なる宇宙の源たちよ……」

「

青年が問いかける。答えは、ない。

「ゲッター線、ワイズマン、イデ……。三つの巨大な意思を
内包するこの世界に、果たして……」

未来はあるのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6823o/>

エンド・オブ・ザ・ワールド スーパーロボットウォーズ

2010年11月5日07時10分発行